

発明文化論

〈第 82 回〉

丸山 亮

国債の信用

この夏、アルゼンチン政府は全国紙の一面全部を使い、債務交換に応じた国債保有者へ元利を支払う、と明言した広告を掲載して驚かせた。財政破綻に直面しているアルゼンチンの切羽詰まった状況が目に見えらる。

アルゼンチンは 2001 年、すでに一度破綻している。通貨危機や短期に大統領が交代するなどの政治的な不安定で、政府の対外債務の支払いが停止されてしまった。この際民間から借りていた約一千億ドルについては、ほとんどの投資家と返済額を 7 割近く減額することで合意し、新たな国債と交換したうえで利子を払ってきた。しかしアメリカの一部投資ファンドはその減額に応じず、自国の裁判に訴えた。すると米国裁判所は、ファンドに全額支払いをしない限り、新たな国債への転換と利払いを認めないという判決を出したのだ。この判決に対して、アルゼンチン政府の広告はいふ。「明白で紛れもない大多数が主張する権利が 1% の国債保有者によって奪われ、少数派の態度によって国債保有者の大多数の利益と権利が脅かされ、一丸となって支払義務を履行しようとするアルゼンチン国家と国民の努力が無に帰すようなことはあり得ない」。

国債、公債は中世以降、ヨーロッパで君主や都市などによって繰り返し発行されてきた歴史がある。たとえばフィレンツェは公債を起こす銀行を設立し、応じる人に債券を渡して、月々、利子を払った。こうした債権は額面よりも安値で売られるのが普通だった。キリスト教では利子を取ることが聖書の教えに背くとされていたものが、時代とともに、経費分は徴収して構わないようになっていく。それでも債権の所有者が換金を望むとき、安値で買い取るのは可能かどうかの神学論争が行われたりしている。

教皇の宗教的権威を背景に募集された公債もある。クレメンス 7 世が首都を守る名目で起こした「信頼の山」、対トルコ戦を続けるためのピウス 5 世の「宗教の山」、パウルス 4 世治下の「期間 9 年の山」などが知られる（ヨハン・ベックマン「西洋事物起原」）。山というのは公債発行のための銀行のことで、今日でもイタリア語の「慈悲の山」は、抵当をもとに金を貸す質屋を意味する言葉として、その名残をとどめている。

日本も日清、日露、第一次、第二次大戦などでは、軍事費を調達するため、多額の国債を発行してきた。日露戦争時の国債発行に伴う裏話は「高橋是清自伝」に詳しい。外債募集の可能性を探っていくうち、4 分の利付、額面の 9 割で発行することができれば成功と言えること、多額の募集には担保が必要になることなどだ。そうして第 1 回の 6 部利付、期限 7 年の公債の募集では、英米同時の募集を成功裏に乗り切り、さらに第 2 回の募集に向かう。その際、政府が煙草専売益金や鉄道収益を担保にする覚悟でいたところ、関税収入の担保を優先させる決断をした。日露戦争は日本の勝利に終わったが、講和談判で日本が償金の要求を撤回したことが報じられると、公債の市場価格が急に下がったりもしている。

先日テレビで、第二次大戦に向かうアメリカの公債募集にチャップリンが一役買い、国民に購入を進める熱い演説をぶっている映像を見た。アメリカに移住したユダヤ系の彼が、対ナチスの戦争に加担するのは理由のないことではない。

日本では太平洋戦争時、国民に国債の購入をほとんど押し付けた。大島静日記「戦時下の母」（島利栄子編、展望社）には昭和 19 年 6 月 24 日に「夜班常会国債債権の件。班長誰れも引受ける気がないので宅です」と記されている。

公金の募集に公債を発行するという発明は、数世紀の歴史を経てもなお、その成否が結局、信用力に帰するのである。

（まるやま りょう 共生国際特許事務所 弁理士）